

長崎県感染症発生動向調査速報

平成28年第41週 平成28年10月10日（月）～平成28年10月16日（日）

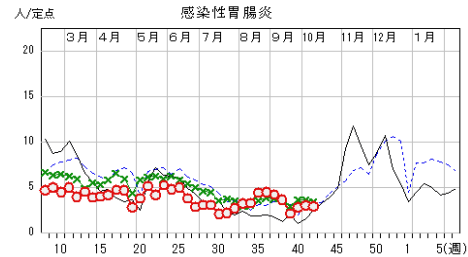
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

（1） 感染性胃腸炎

第41週の報告数は129人で、前週より3人少なく、定点当たりの報告数は2.93であった。

年齢別では、2歳（17人）、3歳（17人）、1歳（15人）の順に多かった。

定点当たりの報告数が多い3保健所は、県央保健所（7.33）、佐世保市保健所（4.17）、上五島保健所（3.00）であった。

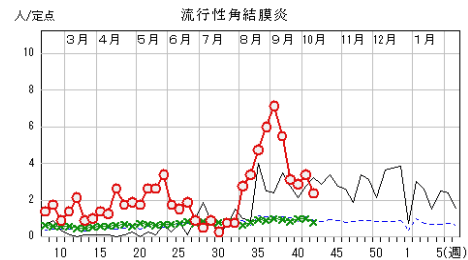


（2） 流行性角結膜炎

第41週の報告数は19人で、前週より8人少なく、定点当たりの報告数は2.38であった。

年齢別では、30～39歳（5人）、20～29歳（4人）、3歳（3人）の順に多かった。

定点当たりの報告数が多い3保健所は、佐世保市保健所（12.00）、県央保健所（4.00）、県南保健所（1.00）であった。

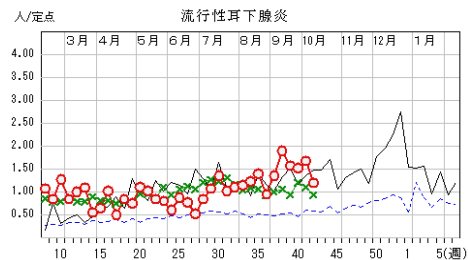


（3） 流行性耳下腺炎

第41週の報告数は53人で、前週より21人少なく、定点当たりの報告数は1.20であった。

年齢別では、4歳（11人）、8歳（10人）、3歳（7人）の順に多かった。

定点当たりの報告数が多い3保健所は、五島保健所（3.75）、壱岐保健所（3.00）、佐世保市保健所（2.83）であった。



○ 当年(長崎県) — 前年(長崎県)
× 当年(全国) - - 前年(全国)

☆上位3疾患の概要

【感染性胃腸炎】

第41週の報告数は、前週より3人減少して129人で、定点当たりの報告数は2.93でした。壱岐地区と対馬地区以外の地区から報告があがっており、県央地区（7.33）、佐世保地区（4.17）及び上五島地区（3.00）の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況です。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くを乳幼児が占めています。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早目に医療機関を受診させましょう。

【流行性角結膜炎】

第41週の報告数は先週より8人減少して19人で、定点あたりの報告数は2.38でした。佐世保地区の定点あたり報告数は「12.00」で、依然として警報レベル基準値「8」を超えた状態が続いており、今後の動向に注意が必要です。2015年以降、全国的に流行性角結膜炎の主な原因ウイルスとしてアデノウイルス54型が検出されていますが、本県においても、6月に搬入された4名分の検体から検出されました。

本疾患は、主にD群のアデノウイルスによる疾患です。涙液や眼脂で汚染された指やタオル類からの接触感染により伝播し、小児からお年寄りの方まで幅広く罹患します。潜伏期は8日から14日で、急に発症し、眼瞼の浮腫、流涙、耳前リンパ節の腫脹を伴います。角膜に炎症が及ぶと透明度が低下することがあります。さらに、新生児や乳幼児では偽膜性結膜炎を発症し、細菌の混合感染で角膜穿孔を起こすので注意が必要です。有効な治療薬はなく、対症療法が基本となります。感染力が強いので、眼分泌物はティッシュペーパーなどで除去し、直接手で触れないように気をつけましょう。また、手洗いを励行し、洗面器やタオルを共有せず、触れた場所をアルコール等でよく拭くなどして感染防止に努めましょう。

【流行性耳下腺炎】

第41週の報告数は、前週より21人減少して53人となり、定点当たりの報告数は1.20でした。五島地区(3.75)および壱岐地区(3.00)の定点あたり報告数は注意報レベル基準値「3」を超えていますので、引き続き今後の動向に注意が必要です。

本疾患の潜伏期は2～3週間(平均18日前後)で、唾液腺の腫脹・圧痛、嚥下痛、発熱を主症状として発症します。唾液腺腫脹は両側、あるいは片側の耳下腺にみられることがほとんどですが、顎下腺、舌下腺にも起こることがあります。感染しても症状が現れない不顕性感染も特に子供に多くみられますが、免疫はちゃんとつきます。

患者の呼吸器の飛沫を吸い込む飛沫感染、もしくは患者の唾液で汚染されたものと接触して感染します。手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。本疾患の感染力はかなり強いため、集団生活に入る前にワクチンで予防しておくことも最も有効な予防法です。

★トピックス：インフルエンザを予防しましょう！

インフルエンザの全国的な流行は、例年11月下旬から12月上旬頃に始まり、年が明けて1月から3月頃にピークを迎えます。本県では、1月から本格的な流行が始まり、以後患者数が急増して2月初旬から中旬にかけてピークに達する傾向にあります。流行開始の目安としている定点あたり報告数「1.00」に対し、第41週の報告数は0.06と低いですが、早めの対策が重要です。

インフルエンザは、インフルエンザウイルスを原因とする気道感染症です。他の原因によるかぜ症候群より重症化しやすい傾向がありますので注意を要します。感染経路は、咳やくしゃみの飛沫による飛沫感染と、飛沫等に含まれるウイルスが付着した手指で自分の眼や口、鼻を触ることによって成立する接触感染があります。1日から3日間の潜伏期間のあとに38度以上の発熱、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛、関節痛などの全身症状が突然現れます。これに続いて咳、鼻汁などの上気道炎症が起こり、約1週間で軽快するのが典型的なインフルエンザの症状です。呼吸器、循環器等に慢性疾患を持つ方は、その病状が悪化することもあります。小さなお子さんの場合、熱性痙攣や気管支喘息を誘発することもあります。

飛沫や接触により感染が成立するため、外出先から帰宅した際の手洗いの励行やマスクなどによる「咳エチケット」の徹底など、積極的な感染予防を心掛けましょう。また、インフルエンザワクチンは、接種すればインフルエンザに絶対にかからない、というものではありませんが、発症及び重症化を一定程度予防する効果があります。ワクチンの予防効果が期待できるのは、接種した(13歳未満の場合は2回接種した)2週間から5か月程度までと考えられていますので、流行が始まると考えられる11月下旬に間に合うよう、早めにワクチンを接種しておくことが望ましいです。

長崎県におけるインフルエンザ報告数の推移

